

昭和 SPレコードで逃れば(七)

政見レコード 〔その三〕 「憲政の神様」 尾崎行雄

SPレコード収集家 ■ 城内 實

尾崎である。

(三)

続けて尾崎は、「(中略) 真に國家を憂い、あるいは自分の生活を心配する者は、この上不景氣を深刻にすべき両大政党に共に投票を入れるべきものとはなかろうと思う。しかしながら、苦しんで餓死したいという者は税を増すという仲間に(票を)入れることが、首くくりの本望を達するには一番近道であるから、首のくくりたい者は入れても良からけれども、生きたい者はこの上増税に賛成することが出来ないはずである。増税は、いかに減らすということは、国民に

磨の論客の顔であり、また、熱気がこもったその声は不屈の精神に満ちている。普選即行を訴え続けた尾崎が、ようやく実現が、その際「憲政の神様」尾崎行雄が与党政友会総裁の田中首相に対抗して「普選投票に就て」というレコードを吹き込んで書いた。この尾崎のレコードを先日、偶然休暇先の古道具屋で発見した。残念ながら、三枚組の内最初の一枚目はレコードの山の中にはなかつた。それでも、約十数分に亘る尾崎の気迫に満ちた演説は、その人となりを推し量るに充分であつた。

人間の声の質や顔の表情でその人の人格がある程度伝わつてくる。尾崎行雄の顔は、百戦錬

(一)
前々回、田中義一の政見レコード「國民に告ぐ」を紹介したが、その際「憲政の神様」尾崎行雄が与党政友会総裁の田中首相に対抗して「普選投票に就て」というレコードを吹き込んで書いた。この尾崎のレコードを先日、偶然休暇先の古道具屋で発見した。残念ながら、三枚組の内最初の一枚目はレコードの山の中にはなかつた。それ

(二)
尾崎は二大政党の与党政友会、野党民政党的双方を次のように厳しく批判している。「しこうして政府は、地租移譲をもつて人民を釣ろうと考え、反対党はこれに対して教育費及教員報酬を全部国庫に移すべしという説を唱えてやはり選挙民を釣ろうとしておる。しかも、両党とも

これがために要するところの財源をどうするかということは一言も言わない。財源なしではこの二つのことは出来ない。強いて行おうとすれば、一方において減らすと同時に、それだけの金額を他方において増やすなければならない。右に増やして左に減らすということは、国民にとっては少しも増減のないと同じ働きになる。かくのごとき見え透いたことより他に何にも言え得ない。」

前回紹介した井上準之助や高橋是清は原稿をほぼそのまま読んでいる感があるが、尾崎の場合はメモ程度は用意したであろうが、明らかに自分の言葉で聴衆に訴えている。さすが弁士

今日の不景気をいよいよ深刻にする結果を生ずるけれども、就中少数者の利益を与えて多数者を苦しめるという税の増し方であればなお不景気をひどくする。」と述べている。要するに尾崎は、首のくくりたい者は、この不景気の中にあって増税をしようとしている両大政党に票を入れるが良いということを言

つてゐるのである。奇抜な表現を使つて尾崎は選挙民、それもおそらく初めて投票する庶民の歓心を買つてゐる。

さらに、尾崎は、「(中略) 両大政党は、だいたい財閥から運動費をとつてゐる。実を言うと日本の衆議院の最大多数は財閥の手先であつて、一般人民の味方ではない。」(以上、筆者の音盤からの聞き取りによる)と断じてゐる。七十年前も今も、増税を逆手にとつて与党批判をするという政治手法は全く変わつておらず、また、「財閥の手先」ではないにしろ、現在の国会議員の多くが、広く一般国民の利益や福利よりも、むしろ地元や一部企業の利益誘導に奔走している様子も當時と似通つてゐる。

(四)

昭和十二年の第二十回総選挙直前に吹き込んだ尾崎の「立候補の御挨拶」というレコードは発禁処分にあつてゐる。この頃尾崎は国会で命がけの演説を行つており、尾崎はその著書「わ

が遺言」(昭和二十六年国民図書刊行会)で、次のように語つてゐる。

「第七十議会、政府は林(銑十郎)内閣であつた。私は当時の日本の現状を観望して八十歳の老軀を挺げて演壇に立たざるを得なかつた。私は国家のため黙つておつては、議員の職分がすまないと考えた。」

その際、尾崎は次の二つの句を辞世の句として詠んだ。

大君も聞こし召すらん
命にもかへてけふなすわが言あげを

正成が陣に臨める心もて
我は立つなり演壇の前
尾崎行雄も愛國者であつたのである。

(五)

南鮮と北鮮の事変(筆者注…朝鮮戦争)につかまえた。

続けて、「國家が眞に人民の意思を尊重するなら、政権は四年も続けば長い方である。(中略)いかに衆望をあつめ善政をもつてしまつても、三年も続けばそろそろ飽きられてくるし、また失策も必ず起るものである。スター・リン首相はツアーホテルに住まい、二十何年も政

開をはかつた。かれらの真意がどこにあつたかは、すこぶる明瞭だ。すなち、武力と暴力による世界革命の完成のために、あらゆる策略を用い、虎視眈々としてその機会をねらつておつた。たまたまその好機を、あらゆる策を用い、虎視眈々としてその機会をねらつておつた。たまたまその好機を、



権を握つておるが、暴力主義以外の何者でもない。全体主義、帝国主義である。」と述べている。さすがに共産主義の本質を良く見抜いてゐる。

(六)

筆書は手放しで「憲政の神様」尾崎を賞賛しているわけではない。尾崎は戦後漢字を全廃せよといふ極端なことを提唱をした人物でもある。それでも、党利党略、利益誘導型の無節操な国會議員が溢れてゐる現在にあつて、その氣骨溢れる精神には畏敬の念を禁じ得ない。

(続く)